

# 『株式会社に社会的責任はあるか』

奥村 宏著 — 岩波書店 2006年



## 早瀬 昇 (はやせのぼる)

社会福祉法人大阪ボランティア協会常務理事。1955年大阪生まれ。大阪府立大阪社会事業短期大学専攻科修了。大学在学中に大阪ボランティア協会へ拠点を置き「大阪交通遺児を励ます会」「誰でも乗れる地下鉄をつくる会」などでのボランティア活動に参加。大学卒業後、フランス、ベルギーの障害者施設 (L'Arche) で研修をし帰国後、市民活動の総合支援・推進団体、大阪ボランティア協会に勤務などを経て現職。主な著書は、『寝ても覚めても市民活動論～ミーティングや講座の帰り道に読む35の視点 (大阪ボランティア協会)』、『市民社会の創造とボランティアコーディネーション』(筒井書房) など。

推薦者

もう20年ほど前になるが、内橋克人さんをインタビューした際に、内橋さんの「法人資本主義の日本では…」という言葉にキョトンとしていたら、「君、法人資本主義も知らんのか!」と激怒されてしまった。大学では電子工学を専攻し経済学に疎かった私にとって、それが「法人資本主義」の提唱者である本書の著者を知る最初だった。

法律上、便宜的に人格を与えられたにすぎない法人が、生身の人間を「会社人間」化するなどの形で支配する。この事態を「会社本位主義」と名付け、その構造を解明してきた著者が「企業の社会的責任」について考察したのが本書だ。

その論理展開は異色だ。まず、他の文献では問題にされることさえない「企業は責任の主体になりうるのか」という論題設定から始まる。ここで株式会社が焦点となるのは、大企業の圧倒的多数を占めることに加え、有限責任の法人であるからだ。

株式会社は、所有者である株主が、自らの株の価値分までしか責任を負わず、それを越える責任は問われない。そこで、かのアダム・スミスは無責任な企業体が増えるとして、その設立を一部の例外を除き禁止すべきだと主張した。一方、J・S・ミルは株主が現に資本金を拠出し、それが明示されていれば、資本金が担保にできるとして、その設立を支持。事業資金を広く集めやすいことから、世界中に株式会社が広がっていった。

では、その株式会社の社会的責任とは何か? 刑法では法人に犯罪能力はないとされ、法人を処罰する法律は独占禁止法や訪問販売法などわずか。法人の経営者が責任を負うと考える方が実際のだが、米国で貯蓄貸付組合の破綻処理時に約4千人が投獄されたのに対し、日本の住専問題で刑事罰が科せられたのは時効の壁もあり2人だけ。そもそも株の相互持ち合いで、経営者の責任が追及されにくくなっている。これで良いのか…。

このような視点からは、「企業批判に対しては社会事業への寄付によって対抗する」のが社会貢献活動であり、CSRは「企業改革を阻止あるいは妨害する役割を果たしている」ことになる。これらの主張は、評者には、ネガティブな側面だけを見すぎているかと思える。有限責任法人の問題を問う視点から「大企業を解体して、できるだけ小さく分割する」とも提案されている。その可否はともかく、経営者が真に社会的責任を持てる体制の整備は確かに重要だ。

本書の主張をどう評価するにせよ、CSRを議論する上で必読の書だと言える。

CEL

### Books : editor's choice

- 『多民族共生社会ニッポンとボランティア活動』田村太郎 明石書店 (2000年)
- 『持続可能な消費と生活者』原ひろ子、小澤紀美子 放送大学教育振興会 (2003年)
- 『「人口減少経済」の新しい公式—「縮む世界」の発想とシステム』松谷明彦 日本経済新聞社 (2004年)
- 『ヨーロッパのCSRと日本のCSR—何が違い、何を学ぶのか。』藤井敏彦 日科技連出版社 (2005年)
- 『CSR—企業と社会を考える』谷本寛治 NTT出版 (2006年)
- 『企業評価+企業倫理—CSRへのアプローチ』岡本大輔、梅津光弘 慶應義塾大学出版会 (2006年)
- 『社会的責任のマーケティング—事業の成功と「CSR」を両立する』フィリップ・コラー、ナンシー・リー 東洋経済新報社 (2007年)
- 『企業の社会的責任 (CSR) の徹底研究—利益の追求と美徳のバランス—その事例による検証』デービッド・ボーゲル 一灯舎 (2007年)
- 『アジアのCSRと日本のCSR—持続可能な成長のために何をすべきか』藤井敏彦、新谷大輔 日科技連出版社 (2008年)
- 『進化するCSR—「企業責任」論を超えた「変革」への視点』岡本享二 JIPMソリューション (2008年)
- 『CSR時代の社会貢献活動—企業の現場から』日本経団連社会貢献推進委員会 日本経団連出版 (2008年)
- 『社会的責任の時代—企業・市民社会・国連のシナジー』功刀達朗、野村彰男 東信堂 (2008年)
- 『CC戦略の理論と実践—環境・CSR・共生』猪狩誠也、上野征洋、剣持隆、清水正道 同文館 (2008年)
- 『CSR「つながり」を活かす経営』日経CSRプロジェクト 日本経済新聞出版社 (2008年)
- 『会社員のためのCSR入門』大久保和孝、高嶽、足達英一郎他 第一法規 (2008年)
- 『会社員のためのCSR経営入門』大久保和孝、関正雄他 第一法規 (2008年)
- 『サステナビリティと本質的CSR—環境配慮型社会に向けて』後藤敏彦、藺田綾子 三和書籍 (2009年)
- 『企業の社会的責任経営—SRと国連グローバル・コンパクトの可能性』江橋崇 法政大学現代法研究所 (2009年)
- 『企業の社会的責任 (CSR) の基本がよくわかる本』海野みづえ 中経出版 (2009年)
- 『ISO26000で経営はこう変わる—CSRが拓く成長戦略』小河光生 日本経済新聞出版社 (2010年)
- 『戦略的CSRのススメ』森本昌義 日新報道 (2010年)
- 『ISO26000:2010—社会的責任に関する手引き』ISO/SR国内委員会 (財)日本規格協会 (2011年)